九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

葉煙草専売所の営繕における「西洋形」の意味について

西山，雄大
九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻 ： 博士後期課程

末廣，香織
九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門

https://doi.org/10.15017/4354922

出版情報：都市・建築学研究. 38, pp.9-16, 2020-07-15. 九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門
バージョン：
権利関係：

都市・建築学研究　九州大学大学院人間環境学研究院紀要　第38号，2020年７月
J. of Architecture and Urban Design, Kyushu University, No.38, pp.9～16, July. 2020

葉煙草専売所の営繕における「西洋形」の意味について

A Study on "Seiyo-Gata" in the Building for the Leaf Tobacco Monopoly Bureau

西山雄大*，末廣香織**
Yudai NISHIYAMA, Kaoru SUEHIRO

This paper focuses the word: "Seiyo-Gata" in wooden building for the Leaf Tobacco Monopoly Bureau designed by TSUMAKI Yorinaka and his associates. It has been interpreted as a typical representation of "Gi-yohfu" style, which means "Western-Imitation on appearance" in the Early Meiji Era. The study is aimed at clarifying the techniques and component details by comparing with some analogies and designs in carpentry books. ① "Seiyo-Gata" style was an accumulation of some exterior parts such as double hung windows and clapboard wall. In the building for the Monopoly Bureau, wooden ornaments: bargeboard, finial or chamfer were used as a representation of status. ② The building style has been used as a format of standard design. That made it possible to build a lot of facilities all over Japan in a limited time.

Keywords: *Building Section for Leaf Tobacco Monopoly, TSUMAKI Yorinaka, Gi-Yohfu, Carpentry Books, Standard Design*
臨時葉煙草取扱所建築部，　妻木頼黄，　擬洋風，　建築雛形書，　標準設計

1.　はじめに

1-1.　研究の背景と目的

「西洋形」は、明治期の木造建築物の様式概念を表す語で，「西洋風」を意味するとされる[2) 4)]。「西洋模（摸）造」や「西洋造り」の他，「西洋風家作」や「ハウス」，「西洋舘（館）」などの語も見られるが，「擬洋風」が後の観察者による呼称[註1)]であるのに対して，何れも同時代の価値観を直裁に反映した語として理解されている。従来は，それらに通底する「模倣」の意識への評価から，その定義や表現技法について所謂「擬洋風建築」との関わりの範疇での議論に終始してきた。

筆者は，技師妻木頼黄が建築掛長を務めた「臨時葉煙草取扱所建築部」（以下，建築部）による葉煙草専売所の営繕に関して，その事務所棟の設計図書中に「西洋形」及び「西洋摸造」の表記を見出した。開化期の洋式技術移入の様相を物語るものとして理解される「西洋形」なる様式概念が，海外経験豊富な妻木によって明治30年前後の官衙営繕に採用されたことの意味は小さくないと考える。本稿では，専売所の現存遺構の調査報告を中心に，明治期の木造意匠をめぐる意識を読み解く鍵として「西洋形」の実相を明らかにすることを目的とする。

*　空間システム専攻博士後期課程
**　都市・建築学部門

1-2.　「西洋形」の類語とその理解

初田亨は，明治初期の三井組関係の営繕に見られる「西洋造り」の語に着目し，民間における西洋建築導入の特性を考察した[2)]。そこで，「西洋造り」が形態・様式の模倣であり，構造の模倣とは質的に異なった様相であることを示すとともに，「西洋形」などの類語も同様の意味であると結論付けている。

また，明治期の三重県の建築施設の構成を整理した菅原洋一によると，明治10年代以降に木造で建設された県庁舎や警察派出所，学校校舎の工事においても「西洋形」及び「西洋模造」の使用が見られる[3) 4)]。菅原は，初田の見解に基づいて「西洋形」とは建物の外観についての様式を指すものであるとし，さらに軒蛇腹や上げ下げ窓などの細部意匠にも着目する。個々の洋風装飾の集積により，時として和風意匠も混淆しながら総体としては「西洋形」が成立するとの解釈を提示している。さらに，それらの実例が必ずしも洋式小屋組を採用していないことから，架構との関係性を否定する。ただし，様式を洋風に区分されている建築物のうち，「西洋形」や「西洋模造」と称されるものはごく一部に止まるが，その峻別の要因については特に言及は無い。

他方で清水重敦は，「模造」とは本来は煉瓦造や石造など組積造とするべきところを木造で代用した「構造上の模造」であり「様式上の模造」では無いとの見解を示

建築年	建築名称	構造階数	外壁	軒	開口部	大屋根	玄関屋根	廊下	細部意匠	技術者	備考
M12	県庁舎	木2	大，塗	蛇	上下	寄	入	ベランダ	ア，円，隅	清水	「西洋形木製二階建」，東立和小屋，M20増築部洋小屋，各室板張，現存
M19	一中	木1	大，塗，下	蛇	上下	寄	唐	片，中	兎，虹，組，蛇，ア	清水，信太	教室「西洋模造」，廊下「西洋模造片軒日本造り」
M33	四中	木1	大，下	蛇，持	上下引違	入	入	片	ア，持，魚，円，板	清水，浅生，宮崎	「西洋模造」，洋小屋，※三中は現存
M24	津・万町派出所	木1	大，塗	蛇，持	上下			無			「西洋模造」，見張所板張
註	外壁－大：大壁，塗：漆喰塗，下：下見板張 ／ 軒－蛇：軒蛇腹，持：軒持送り ／ 屋根－寄：寄棟，入：入母屋，唐：唐破風										
	細部意匠－ア：アーチ，円：タスカン式円柱，隅：隅石，板：破風板飾り，兎：兎毛通，組：組物，虹：虹梁，魚：懸魚										
	技術者－清水：清水義八，信太：信太悦蔵，浅生：浅生久次郎，宮崎：宮崎官蔵										
	※二・三・四中は清水による同年の建設で同一の意匠だとされるが，『縣有財産取調表』では二・三中に「西洋模造」の記載は見られない。										

表1 「西洋形」・「西洋模造」の使用例：菅原（1991）より[4]　（※下線筆者）

写真1 旧三重県庁舎[註2]

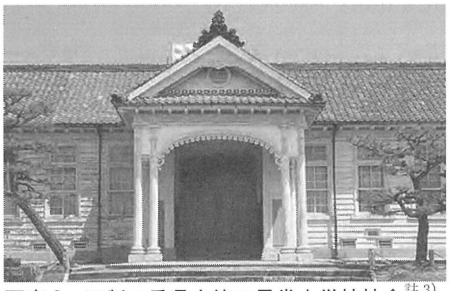


写真2 旧制三重県立第三尋常中学校校舎[註3]

	年月	営繕組織	業務概要・備考
葉煙草専売	M29.10～	臨時葉煙草取扱所建築部	
		部長：目賀田種太郎	①葉煙草専売所の敷地の買収事務
		建築掛長：妻木頼黄	②葉煙草専売所の庁舎倉庫の造営
		技師：矢橋賢吉	
		技手：川口直弼(監督科主任)・鎗田作造(設計科主任)	
	～M32.03	沼尻政太朗(調査科主任)・小林金平(製図科主任) 以下延べ36名	
煙草専売	M37.04～	臨時煙草製造準備局建築部	
		局長：阪谷芳郎	①刻煙草以外の徴収及買収・建築事務
		部長：妻木頼黄	②塩専売実施準備に要する建築事務
塩専売	M38.09～	大蔵省臨時建築部	①煙草専売・塩専売の臨時建築事務
		部長：妻木頼黄	②臨時税関工事部廃止後の事務引継ぎ
		第一課長：矢橋賢吉	－建築工事の計画及設計・実施及監督 等
		第二課長：丹羽鋤彦	－土木工事の計画及設計・実施及監督 等
		第三課長：不詳	－工事請負契約・会計 等
	M45.06～	大蔵省大臣官房臨時建築課	専売関連の営繕が落着し機構縮小
		課長：妻木▸丹羽▸矢橋	妻木は課長を退き技術顧問へ(T2.05)

表2 専売建築を管掌した営繕組織[註4]

す[6]。「模造」の対象物に関して両論は一見対蹠的だが，開化期の洋風建築の技術的系譜を整理する際に「西洋形」やその類語を手がかりとする点においては一致をみる。

1-3. その他既往研究と本稿の位置付け

「西洋形」を直接扱ったものではないが，我が国の洋風建築様式の導入過程における建築関連洋書やそれらを翻訳紹介した建築雛形書の存在とその役割に関しても，近年成果が蓄積されつつある。とくに池上重康は北海道の開拓使建築において，米国のパターンブックの図版からの直接的な引用表現が散見されることを実証的に明らかにした[10]。従来漠然と「模擬的」と総括された初期洋風建築の細部意匠から平面計画，構法に至るまでの明確な参照元が明らかにされた点で大きな意義を持つ。

妻木もまた，設計参考資料として使用したであろう和洋の建築関連書を多く遺している。本稿では，それらと併せて明治期に出版された代表的なものを紐解き，同時代の類例や妻木の設計関与作品との比較を通して意匠的な潮流の把握を図った。どのような細部意匠の選択と組み合わせによって「西洋形」としたのか，その設計意図と背景を解き明かすとともに歴史的定位を試みる。

2. 研究の対象

2-1. 葉煙草専売所の概要

本稿で取り上げる葉煙草専売所（以下，専売所）は，日清戦争後の増税策の一環として導入された近代専売制度を担うために設立された。明治31(1898)年1月の葉煙草専売法施行により，耕作者は収穫した全量を乾燥調理の後に管轄の専売所への納付を義務付けられ，鑑定と計量を経て買取相当額にあたる賠償金の交付を受けることとなった。その実運用に先立ち吏員教育等の準備業務のため，同29(1896)年10月に臨時葉煙草取扱所が設置され，諸施設の造営が建築部建築掛の設計及び工事監督によって進められた。専売所は全国にわたる葉煙草産地の交通上の要地[註5]に置かれその総数は建坪6万3千坪余，倉庫・事務所・収授所から成る本所（一等・二等）が全国（北海道・台湾除く）に61ヶ所，独立した事務所棟を置かない支所が112ヶ所に上った。その分布が全国広範に及ぶことや，専売法施行までの準備期間が限られたこと，加えて工費抑制の必要もあり，一部の煉化造施設[註6]を除いて大半は「堅牢実用」[註7]を旨に同一の形態と仕様による標準設計により木造で建設された。

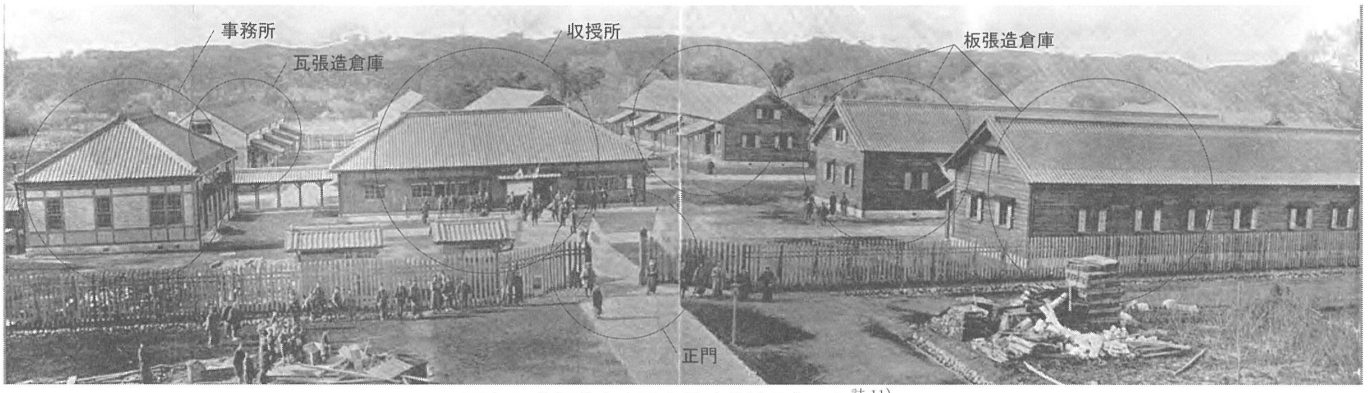


写真 3 葉煙草専売所全景（茨城県太田）[註 11)]

建築名称			備考	構造・階数		小屋組	外部仕上げ					内部仕上げ			
							壁	屋根	基礎	中窓	細部意匠	天井	床	壁	細部
葉煙草専売所	本所	倉庫	倉庫の総面積の1/3	木1	瓦張造	和＋斜	瓦張漆喰塗	妻，瓦	積*	引，鉄，開戸		裏	板	竪	
			倉庫の総面積の2/3		板張造		鎧下見張り	妻，瓦	積*	引，鉄，開戸					
		事務所	「西洋形」，「西洋摸造」	木 1		洋対束	化粧板張ペンキ塗，定木柱	寄，瓦	積	上下	蛇，板，剣，切	塗，蛇	敲，板	塗	切
		収授所	「西洋小屋方形造」	木 1		洋真束	熨斗板張り，定木柱	寄，瓦	敷	引違，鉄		裏	敲，板		猿
	支所	倉庫	本所倉庫と共通か	木 1		和＋斜		妻，瓦	積*	引，鉄，開戸		裏	板	竪	
		収授所	本所収授所と別仕様	木 1		和＋斜	押縁下見板張り	寄，瓦	敷	引違，鉄		裏	敲，板	竪，真，塗	
註		外部	基礎－積：石積(*側廻りのみ)，敷：布敷石／開口部－引：片引硝子障子，鉄；鉄格子／細部－蛇：軒蛇腹，板－バージボード，剣－フィニアル，切－切付面取												
		内部	天井：裏－化粧小屋裏，塗－漆喰塗，蛇－天井蛇腹／床－敲：敲き土間，板－板張り／壁－竪：竪羽目板張り，大－大壁，真－真壁／細部－猿：猿棒面取(障子)												

表 3 葉煙草専売所各仕様比較（木造主要建築のみ）[註 4)]

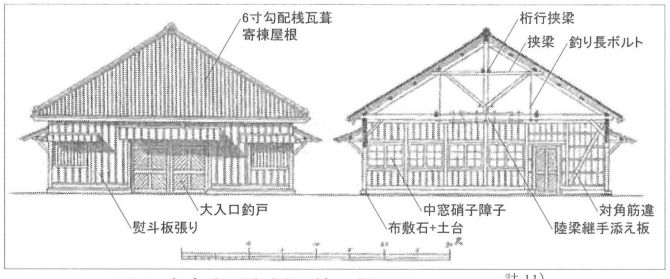


図 1 専売本所収授所棟の側面図・断面図[註 11)]

写真 3 旧加茂出張所外観[註 12)]

写真 4 同・小屋組架構[註 12)]

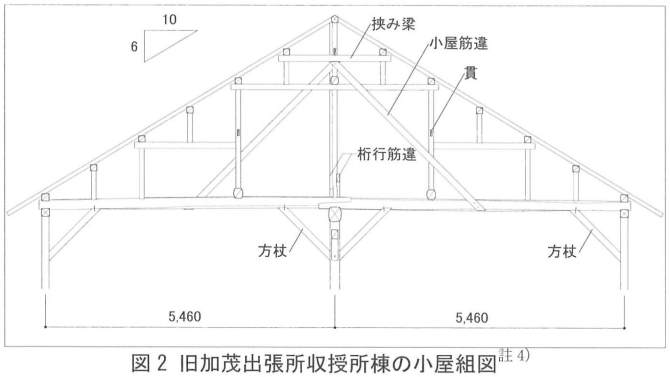


図 2 旧加茂出張所収授所棟の小屋組図[註 4)]

各地の葉煙草産額の多寡によって敷地面積や施設の配置，棟数は一様でないが，本所においては収授所棟が敷地中央に門と正対して置かれ，直角に振った事務所棟と渡り廊下で連結される構成は全般に共通する。本所内の各施設のうち，「西洋形」とされたのは事務所棟のみで，その他の洋風要素としては倉庫の小屋組が「和様に洋風を調味」[註 8)]され，収授所棟が洋小屋とされるに止まる。

支所のうち，倉庫の無いものはとくに出張所とも称された。その収授所棟遺構は旧加茂出張所（岡山県吉備中央町）のものが現存する。本所では事務所棟内に設けられる「人民扣室」や「小使室」を取り込んだため平面形状が変則化し，それに伴うものか和小屋組が採用されたことは以前の報告で指摘[註 9)]した通りである。

2-2. 史料の概要

建築部による設計図書を収めた資料としては，『臨時葉煙草取扱所建築部建築一班』[註 10)]（以下，『建築一班』と略）が知られる。一連の営繕後に大蔵大臣松方正義への報告書として編纂され，巻末には事務所・収授所・倉庫・その他付属施設（渡り廊下・便所・馬繋ぎ・物置等）の各仕様書と平・立・断面の各図面，数例の配置図及び竣工写真を収録する。しかし各部詳細図は紙面の都合から省略されており，全ての設計図書を網羅したものではない。

また，妻木の遺品である「妻木文庫」（建築学会図書館所蔵）中の雛形書や技術参考書のうち，『諸職模様雛形 下』（井上勝五郎，1869 年）に「西洋形ノ部」があるが，植物文様など図柄の紹介に止まり，直接の関連性は見られない。

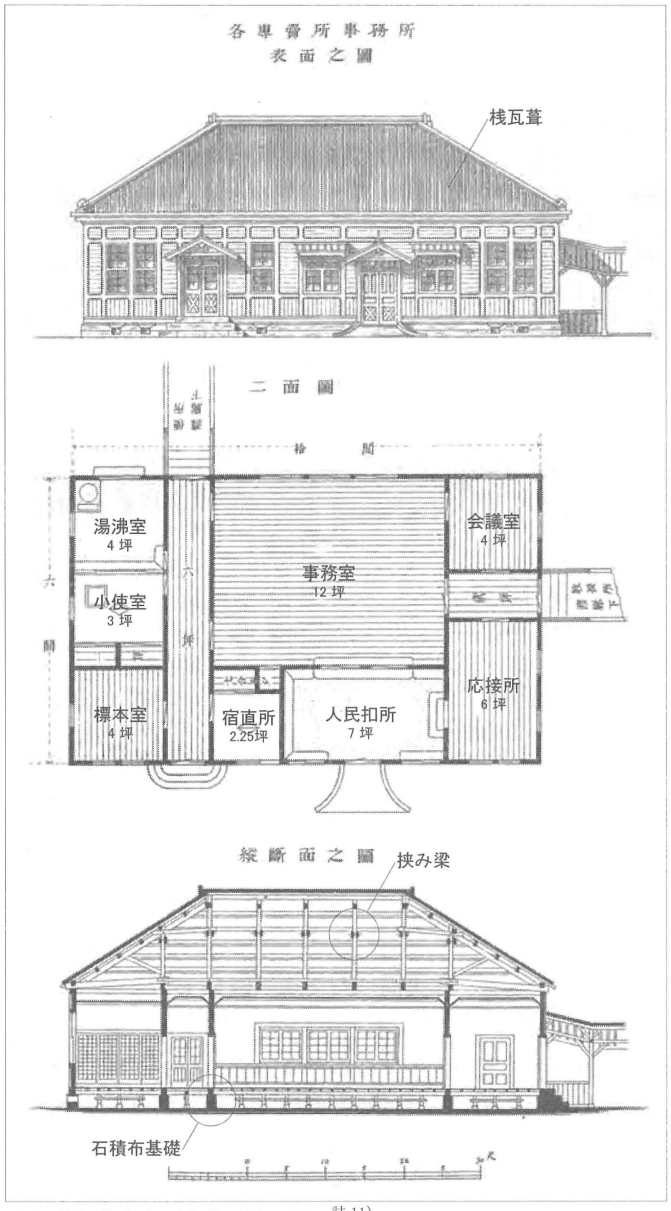


図3 葉煙草専売所事務所棟の図面[註11)] (※室名は仕様書との照合による)

写真5 仙台地方専売局千厩出張所（大正後期から昭和初期）[註13)]

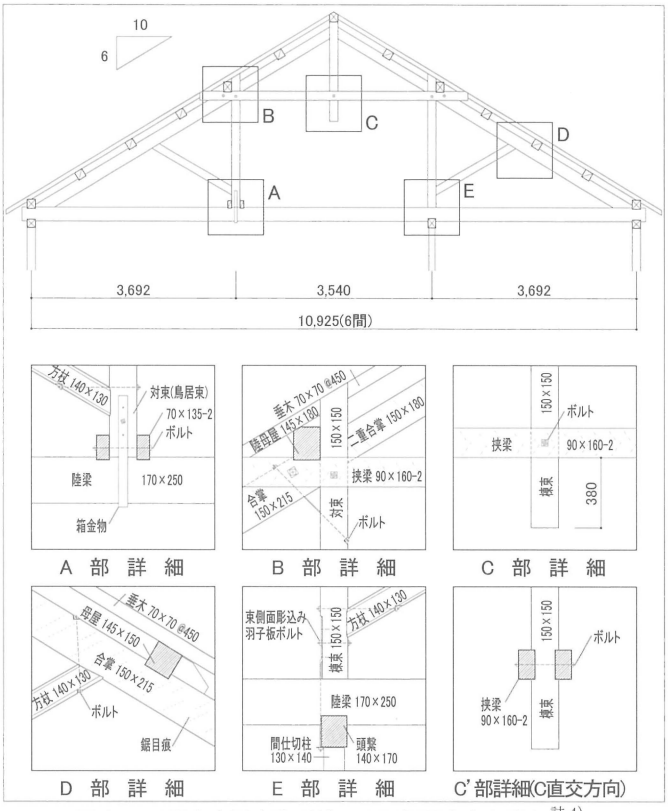


図4 旧千厩専売所事務所棟の小屋組図と各部詳細[註4)]

3. 事務所棟の洋風要素

事務所棟の遺構として全国に唯一現存する旧千厩葉煙草専売所（岩手県一関市千厩町）の現地踏査及び仕様書や類例との比較を交え，各部の特徴を以下に示す。

3-1. 構造計画

小屋組の架構形式は一本ものの陸梁に左右一対の束を置く対束小屋組（クイーンポスト・トラス）で，部材接合はボルト金物による。ボルトは，一般構面では頭部形状が四角のものが，寄棟隅部では六角が用いられる。また，小屋裏隠蔽のため材表面には木挽痕が残る。全国的な機械製材の普及が明治30年代以降とされる[1)]ことからも，主要部材の多くは建設当初のものと考えられる。

対束は仕様書中では「鳥居束(木偏に短)」と旧来の大工用語で表記され，挟梁と併せた門型の主フレームに方杖や合掌といった斜材を付加した構成と説明[註14)]される。梁間を無柱とする本所の収授所棟が真束組の化粧小屋裏現わしであるのに対し，事務所棟には陸梁を中途で受ける間仕切壁が存在するという平面計画上の相違がある。さらに天井が張られることもあり，側柱から陸梁への方杖を設けない架構形式が選択されたものと考えられる。「西洋形」は構造とは無関係とされるが，本事例では隠蔽部の架構にも洋式技術の導入と施工者への配慮，監理を円滑に進めるための工夫が看取できる。

その他，洋式構法の導入箇所として，壁体への筋違の取り付けと石積による布基礎の敷設がある。本調査では目視確認出来ていないが，仕様書及び断面図によると間仕切下にも側廻り同様の布基礎が通される。

3-2. 玄関庇廻り

来館者にとって最も目に付く箇所として，玄関廻りにはとくに洋風を印象付ける装飾が集中的に施される。

3-2-1. バージボード

バージボード (Bargeboard) とは連続した歯飾りや房飾

りが施された軒板を指す。葉煙草専売所の事務所棟の左右の玄関庇にはそれぞれバージボードが付され，敷地内の他の建物とは一線を画す。後述する外壁と併せて，洋風の外観を司る要素としての扱いが垣間見える。その詳細図は現存しないが「圖ノ如ク繪様繰致シ」[註15]とされ，半円形の基本形状の反復により構成される。破風頂部と尻部に配われる花弁状の彫刻は，確証には至らないが煙草の花葉を思わせる。同型のものは関原専売所（新潟県三島郡）にもあり，「表面之圖」（図3上部）では判別不能だが各所共通と見られる。古写真の比較からは，左右庇のバージボードの基本単位の反復形態が異なることがわかる。建設当初のものか不明だが，昭和15(1940)年時点（写真9）では相違が見られる。対向地への移築転用（1934年）や修理の際に生じたものか，左右玄関の用途の違い（左：吏員用／右：来客用）によるものか詳細は不明である。

類似のものは旧第四高等中学校門衛所（1893年，金沢市）や旧山形師範学校の音楽練習堂（1884年，山形市）・門衛所（1901年）などに現存するほか，『西洋技術　新撰大工雛形』（秋田弥左衛門，東崖堂，1889年11月）にも掲載され，明治10年代から30年代にかけて広く見られる。池上は同書の「西洋風家根妻之図」（図6）について，「破風飾りは米国風のバージボード[註16]を模写したような正確さ」と評し船載パターンブックの影響を指摘[10]している。ただし，半円の配置間隔や丸孔の有無など細部の違いの要因や表現意図は不詳である。後の塩務局の庁舎では，大工手間の低減を意図したためか軒板飾りは大幅に簡略化される。意匠的な流行の変化もあろうが，軒板飾りの相対的な重要度の低下とも捉えられる。

【千厩葉煙草専売所事務所棟の左右玄関庇のバージボード詳細】

写真6 関原専売所玄関前[註17]

写真8 破風尻部の花弁状彫刻[註18]

写真7 左側玄関庇(H30.3撮影)[註18]

写真9 左右庇の比較(S15撮影，移築後)[註13]

写真10 右側玄関庇(S19撮影，現存せず)[註13]

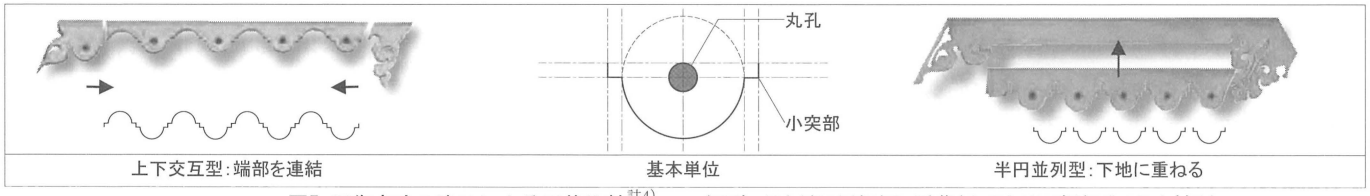


図5 反復方法の違いによる形状比較[註4]　(※ボード上端は屋根板に隠蔽されるため可視部分のみを抽出)

【半円状バージボードの類例】

左上:写真11 旧第四高等中学校門衛所の庇/左下:写真12 同・軒先拡大[註18]/中:写真13 旧山形師範学校音楽練習堂の庇/右:写真14 同・門衛所の庇[註18]

【建築雛形書掲載のバージボード図案の一例】

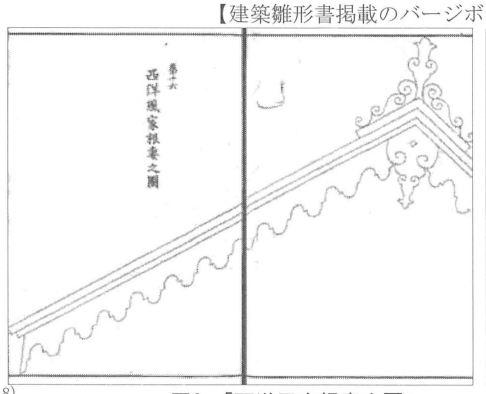


図6 「西洋風家根妻之圖」

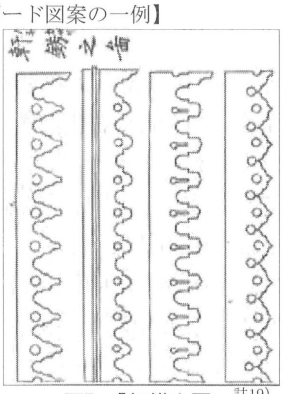
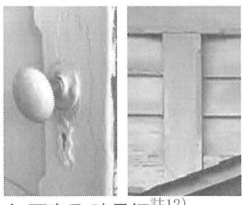


図7 「軒錺之圖」[註19]

【玄関庇の比較】

左:写真15 千厩玄関庇見上げ[註12)]
右:写真16 味野塩務局山田出張所(玉野市)[註18)]

【「切付面取」詳細】



左:写真17 建具框[註12)]
右:写真18 柱・下見板取合部[註12)]

写真19 横浜正金銀行仮本店(M31.7)[註20)]

写真20 赤穂塩務局庁舎[註12)]

【『和洋改良大建築学』掲載の洋風細部意匠の一例】

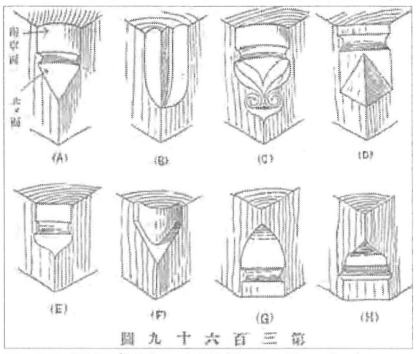


図8 各種の止面(Stop Chamfer)

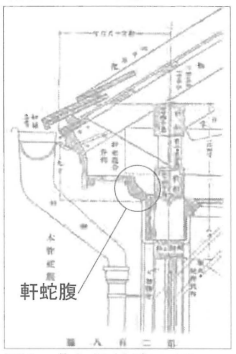


図9 「木骨蛇腹」図

3-2-2. 持ち送り

持ち送りは腕木と方杖の直線部材から成り，材端部と交点の彫刻により瀟洒な印象を与える。なお，塩務局庁舎ではバージボードと同様に彫刻も簡素化されるが，方杖は曲線部材とされ意匠的により洗練された趣向となる。微細な彫刻より遠目にも判別できる部材形状そのものの操作により更に合理的に洋風を表現する手法の確立とも見做せよう。

3-3. 外壁と塗装

外壁は下見板張りだが，柱が化粧現わしとされ大壁とはなっていない。現在は単一色でペンキ塗りが施されているが，竣工当初は柱及び桷，窓台から成る枠組みとその内側の下見板は明確に塗り分けられ，真壁状の壁面構成が強調されていた。同様の外壁塗装は同じく妻木の設計作である旧横浜正金銀行仮本店にも見られ，瓦葺の寄棟家根や上げ下げ窓なども共通する。

現在のような白色に塗装された時期や経緯は不明であり，仕様書にも塗装色の指定は無い[註21)]が，内部建具枠や腰板がやや緑色がかった色調であることから，外装も同系色だったと推測できる。緑白色の外壁塗装は後の塩務局庁舎にも見られる。とくに赤穂の旧三等庁舎（現・赤穂市立民俗資料館）の塗装色の復原[註22)]は関係者の証言に基づいており，戦前期の旧態に近いと見てよいだろう。

3-4. その他細部意匠

『建築一班』巻末の仕様書には「切付面取」の記載が随所に見られ，柱や建具の桟・框などの部材角に面を途中で止め両端を残す舟形の面取り加工が施される。これは，明治期に活躍した建築家三橋四郎の編集による『和洋改良大建築学　中巻』(1904年12月，大倉書店）では，「面ヲ通シテ施サズ中途ニテ止ムルコトアリ之レヲ止面(Stop Chamfer)ト称シゴシツク式ノ特有」(p.397,傍点・下線原文ママ)と解説する（図8)。その他，軒蛇腹が施され，縦長の開口部には上げ下げ窓が嵌る。戦前期の木造洋風建築に共通して多く見られ，単純な手法ながら，玄関庇と併せて端正なファサードを構成している。

3-5. 小結

以上，専売所の事務所棟に関して，洋式技術の導入が見られる架構各部と洋風の外観を構成する諸要素を列挙した。まず対束小屋組とされた要因として間仕切壁と天井面の存在の2点を指摘した。その他では，間仕切壁下の布基礎がある。これは，木造構法の近代化過程を整理した源愛日児によると明治中期以降の学士建築家の設計による洋館建築に典型的に見られる特徴の一つであり[8)]，側壁基礎は基壇状の意匠表現を兼ねる。

また，細部意匠は不明で建物規模も異なるものの，全体の容姿は正金銀行仮本店と酷似することを指摘した。明治31(1898)年7月の供用開始であることから，設計及び工事監理は専売所よりほぼ半年遅れの進行と想像される。推論の域を出ないが，本店建設決定後の急場の営繕に際して，折よく先行していた専売所事務所棟の仕様を使い廻した可能性を指摘できる。この点，正金銀行関連の資料調査を含め，今後の課題としたい。

「西洋形」成立の十分条件を個々の事例から帰納的に定めるのは困難だが，多くの事例に外壁の大壁あるいは下見板張りと軒蛇腹，上げ下げ窓が共通する点は明らかで，和風意匠との効果的な差異化の手法であったことがわかる。バージボードやフィニアルを含む玄関庇の装飾も，和風建築における唐破風玄関と対比的である。源は，和風に比して高い階高を支えるために洋風建築には間柱が置かれ，それが下見板張りの下地を兼ね外壁面が構成された[8)]との見解を示しており，洋風の外観が定型した背景に構法上の合理化の進展が窺われる。

他方で，外観全体の印象にはさほど影響しないと判断されたためか，屋根の桟瓦葺については比較的柔軟な扱いが窺われる。高い軒高で屋根面の大半が視線から蹴られることも，コスト面の要因と併せて瓦葺の妥協的な採用に影響したのだろう。小屋組を始め架構各部に洋式技術が見られる専売所の事務所棟だが，瓦葺という在来の

要素が足枷となり，模擬的な意を含む「西洋形」との表記に止まった可能性も考えられるだろう。

4. 非洋風施設の建築的性格

ここで今一度，「西洋形」とされる事務所棟以外の施設を概観したい。それらの洋風要素としては，収授所棟の小屋組が真束組である他は，事務所棟同様の側廻り及び間仕切下の布基礎，壁体内の筋違など構法上のものは散見される。一方で，装飾としては特筆されるものは無く，個々の外観は全般に非洋風が支配的であることは否定できない。

和洋風を区分する有効な指標は，軒先・開口部・外壁など主要各部の仕様やその総体としての外観意匠であることは既に整理した通りだが，ここでは殊更に和風により伝統性や時代性を強調した復古調の建築的表現は見られない。菅原の論稿では「西洋形」の対義的な語として「日本造」や「日本風」,「日本形」が列挙される[4]が,『建築一班』にはそうした記載は見当たらない。即ち葉煙草専売所の営繕に見られる非洋風意匠の採用は日本的な表現を意図したものでは無く，在来の手法の手堅さと経済性に対しての信頼によるところが大きいと考えられる。

5. まとめ

5-1. 結論

ここまで，葉煙草専売所の各部意匠について，「西洋形」とされた事務所棟を中心に検証した。『建築一班』にはパターンブックや雛形書などの意匠面での参照資料の存在に関しては言及は無く，妻木旧蔵の建築関連書中からも直接の参照元と比定し得るような説得的な材料は見出せなかった。同時代の類例や出版物との比較からは，ある特定の設計参照資料に依拠するのでは無く，当時一般化しつつあった中でも比較的簡便な洋風手法のコラージュ的な組み合わせによって全体像が構築された[註23]ことが窺える。さらに，同時代における学士建築家の設計に共通する木造構法や雛形書の掲載図案と類似の細部意匠が随所に見られることを指摘した。また，菅原が紹介する三重県内の「西洋形」の事例のように唐破風や組物などを用いた和洋折衷的なもの[3][4]とは異質の端正な外観意匠となっており，「西洋形」の構成要件が決して一様に定義できるものではないことが改めて了解された。

「西洋形」及びその類語は明治期の近代化の様相を特徴的に示す様式概念であり、外観優先かつ比較的低廉に旧来の様式からの脱却を印象づける必要に迫られた同時代の木造建築物と不可分の特有の手法であったと捉えられる。即ち「西洋形」の隆盛は「見栄え重視」の技術受容の実態を端的に表しているのみならず，格式の表象としての洋風意匠の寄せ集めに名目的に付与された便宜的な名称であったという成立背景が浮き彫りになる。

構造との関わりについては，少なくとも専売所の事務所棟においては各部に洋式技術の導入が見られる。しかし，洋式真束組の収授所棟は「西洋形」とはされていない点には注意を要する。さらに，臨時葉煙草取扱所建築部の後継組織である大蔵省臨時建築部による塩務局庁舎では，建物配置や外観は専ら洋式とされる一方で，小屋裏隠蔽部は和式構法とされ従来通りの「西洋形」の理解に合致する形式となっている。これは「木造西洋館」と表記[註24]されており，「西洋形＝西洋館」との前提に立てば，「西洋形」なる様式が構造計画とは無関係に成立するとの理解が裏付けられるとともに，木造の専売建築において標準設計に適した定型として採用され固定化されたことが窺える。ただしその際，地方の大工や職工の洋式技術の習得度合いに対する不安や材料調達の困難を顧慮し，専売所の象徴たる本所の事務所棟のみに「西洋形」の適用を止めたものと了解できる。

5-2. 展望と課題

周知の通り，妻木は工部大学校を中退後，渡米しコーネル大学を卒業している他，官庁街整備のためドイツに派遣されており明治期において本邦随一の海外経験を誇る官僚建築家である。本場の洋式建築をよく知る妻木の手になる「西洋形」の官衙建築は，明治30年代以降の「西洋形」の退潮要因を工匠出身の建築技術者から高等教育機関で専門教育を受けた学士建築家への営繕の担い手の交替に求める従前の理解の範疇外にあると言える。これを端緒として，大工棟梁による「見よう見まね」の擬洋風建築と学士建築家による洋館建築，あるいは官に対しての民という，これまでの単純な二元的図式に新たな視座が拓ける可能性もあるだろう。

「西洋形」に内在する外観偏重の意識と断片化された洋風意匠の集積による実現の背後には，建築雛形書の存在を前提とした西洋技術の受容の様態を仮定できよう。現在となっては「西洋形」は事実上，仕様書などの設計図書類や管財資料の文書上の表記でのみ識別可能であることから確認に困難を伴うが，その実相を精確に把握するには更に広く用例を蒐集することが不可欠である。

謝辞

本稿執筆にあたり，斎藤広通氏（仙台市立仙台工業高等学校　非常勤講師）　からバージボードや「切付面取」に関する貴重なご教示を賜った。また，旧千厩葉煙草専売所の現地踏査（2020年2月9日）では，佐々木浩二氏（一関市役所千厩支所地域振興課）・畠山篤雄氏（一関市教育委員会）・熊谷美知子氏（せんまや街角資料館）にご協力頂いた他，山内彩友美氏（堀研究室OG）に記録補助として参加頂いた。旧加茂出張所の調査（2019年5月4日,10月22日）においては，植木直子氏（吉備中央町歴史民俗資料館）のご協力を頂いた他，石田尽氏（農学部OB・美作市）の助力を得た。各位の御厚意に重ねて御礼申し上げます。

註

1)清水によると，堀越三郎が「日本の建築家が外国建築家の為す所を真似た」ものとして用いたのが「擬洋風建築」の嚆矢とされる。（参考文献 5)pp. 20-24）

2)『近代建築史図集　新訂版』（日本建築学会　編，彰国社，1976 年 1 月）p. 98 より転載。

3)三重県立上野高等学校ホームページ（http://www.mie-c.ed.jp/hueno/，2020 年 5 月 12 日閲覧）より転載。

4)筆者作成。

5)敷地の選定は大蔵省主税局による。

6)東京のほか，横浜・神戸・広島・長崎の葉煙草の輸出入に際して諸外国との窓口になる拠点に限って煉瓦造での造営とされ，その様式は獨逸の「レネーサンス式」によるとされた。（『建築一班』pp. 101-103）

7)『建築一班』p. 101 より「葉煙草取扱所ノ建築工事タル専ラ堅牢實用ヲ主トシタルモノニシテ…」。

8)『建築一班』p. 102 より。和小屋組の部材接合部にボルト金物を用いることと，方杖や筋違などの斜材を付加することを指す。

9)拙稿「臨時葉煙草取扱所建築部による明治 30 年前後の木造建築の一様相　～旧加茂葉煙草専売所出張所の収授所遺構に着目して～」（日本建築学会九州支部研究報告集，第 59 号，pp. 609-612，2020 年 3 月）では，筆者発見の「葉煙草取扱所出張所図面」（文中では「原図」と記載）の平面図上の柱位置が遺構の現状と一致することを指摘。建設当初は本所のものと同じく洋小屋だったとの説もあった出張所収授所棟の和小屋組が別仕様に基づくものであることを明らかにした。

10)臨時葉煙草取扱所建築部 編，1899 年 2 月発行。「一斑」表記も散見されるが，本稿では「一班」に統一した。

11)『建築一班』より転載，一部加筆。

12)筆者撮影。

13)せんまや街角資料館所蔵，部分拡大。

14)『建築一班』巻末「葉烟草取扱所新築仕様書」p. 17「一　小屋鳥居束(木偏に短)」の項より。

15)『建築一班』巻末「葉烟草取扱所新築仕様書」p. 23 より。ただし部材名称は「鼻隠シ」とされる。

16)バージボードについては，藤森照信も著書『日本の近代建築（上)-幕末・明治篇-』（岩波書店，1993年10月）p. 149で「兵庫県の三原郡役所のバージボードは，アメリカのカーペンターズゴシックのデザインを正確に写している」と，米国の技術的影響を指摘する。

17)絵葉書「越後関原村外四ヶ村葉煙草試作奨励會　其ノ一」（T3. 10. 31の記念消印，筆者所蔵）より部分拡大。

18)斎藤広通氏より提供。

19)『新撰大匠雛形大全　巻之五』（石井卯三郎・泉幸次郎，精華堂，1897年8月）より転載。

20)参考文献9)p. 111より転載。『横濱正金銀行史附録乙巻』（大正9年11月謄写に代えて印刷発行）では「此假事務所は先般竣工したるにより去る七月十一日より之に移りて営業せり而して其建築費用は假金庫倉庫と共に凡そ参萬七千圓を要せり」と報告された。（p. 129「明治三十一年九月十日株主定式總會頭取相馬永胤氏演説」より）

21)『建築一班』巻末「葉煙草取扱所新築仕様書」p. 41には「塗色ハ係官ノ指圖ニ従ヒ良質ノ塗料ヲ用ヒ塗上グベキ事」とある。

22)「建物全体は落付いたグリーンの色調で統一（中略）補修を行った際，往時の色調を再現するのに随分と苦労された」と紹介される。（住田哲雄：民族資料館に衣替えした旧専売庁舎，そるえんす，No. 23，ソルト・サイエンス研究財団，pp. 12-17，1994 年 12 月）

23)参考文献 7) において柳澤は，雛形本の記載形式における「洋風意匠を外観の図像として消化しようとした指向」を見出している。さらに，図版相互に部分と全体の体系だった相関が見られないことを示し，洋風建築に対する理解が断片的であると指摘する。

24)『大蔵省臨時建築部年報　第二』（1910 年 3 月）p. 32「廳舎新築仕様書」より引用。

参考文献

1)村松貞次郎：日本近代建築技術史，彰国社，1976年9月

2)初田　亨：明治初期の本船町魚納屋と「西洋造り」について，日本建築学会計画系論文集，No. 269，pp. 165-174，1978 年 7 月

3)菅原洋一：明治期の三重県関係建築施設における洋風意匠について-三重県第二・三・四中学校の建築を中心として-，日本建築学会計画系論文集，No. 408，pp. 165-177，1990 年 2 月

4)菅原洋一：明治期の三重県関係建築施設の構成と類型，日本建築学会計画系論文集，No. 422，pp. 144-155，1991 年 4 月

5)近藤　豊：明治初期の擬洋風建築の研究，理工学社，1999 年 8 月

6)清水重敦：日本の美術　No. 446　擬洋風建築，至文堂，2003 年 7 月

7)柳澤宏江・溝口正人：明治時代の建築雛形本にみる洋風意匠の記載形式と記載内容，日本建築学会計画系論文集，No. 613，pp. 197-202，2007 年 3 月

8)源愛日児：木造軸組構法の近代化，中央公論美術出版，2009 年 8 月

9)日本建築学会　編：妻木頼黄の都市と建築，日本建築学会，2014 年 4 月

10)池上重康：明治年間発行の西洋建築雛形書にみる洋風意匠の受容過程に関する研究，前田記念工学振興財団平成 29 年度研究報告，2018 年 2 月

（受理：令和２年６月２日）